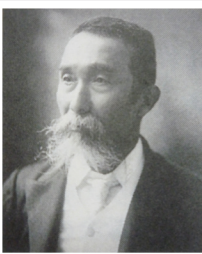




坂本龍馬の甥と北星

北星学園創立百周年記念館

葬儀に讃美歌合唱



坂本直寛 (1853~1911)

昨年夏、「坂本直寛と北星のつながりを調べているのですが」と法政大学大学院人文科学研究科史学専攻の宮腰博子さんが来館されました。私が理解している直寛といえは、幕末のヒーロー坂本龍馬の甥であること。そして、キリスト教精神に基づく理想の社会を築くため、1897年に土佐からクネネツプ原野（現・北見市）に入植した開拓移民団「北光社」を結成。その後、浦臼の聖園農場で開拓伝道を行い、やがて旭川教会の牧師となり、ピアソン宣教師夫妻と共に、魔娼運動や十勝の監獄伝道を熱心に行った人物ということくらいです。長年、記念館の資料を整理してきましたが、直寛と北星の関わりを示す資料を目にしたことはありません。あまりお役に立てず恐縮しているが、宮腰さんが土居晴夫著『龍馬の甥 坂本直寛の生涯』を見せてくださいました。そこには、1911年9月8日、北辰教会（現・札幌北一条教会）で執り行われた直寛の葬儀に、北星女学校の生徒4人が讃美歌を合唱したと書かれています。

わずかな期間に受洗者が46人もいます。北星の生徒がその中に含まれていたかどうかはわかりません。



切り絵：矢島あづさ

ただ、生徒たちはスミス先生から編み物を教わり、靴下や手袋を編んで駄賃をもらうと教会堂建築のために献金したり、日曜学校を手伝ったり、スミス女学校時代から密接なつながりのある教会です。直寛牧師の説教や奉仕活動に心動かされた生徒もいたでしょう。

ハッカ景気の光と影の中で北見を訪れると、クリスマスチャンでなくても、北光社やピアソン夫妻を知らない人はいません。北見はかつて世界市場の7割を占める世界一のハッカ生産地でした。北光社の入植により栽培が始まり、大豆や小麦が1反4円の時代にハッカは30円で取引されていました。

やがて鉄道が名寄、網走、池田へと開通し、物資の集散中継地となった野付牛（現・

北見市）の駅前には17軒もの旅館が建ち並び、ハッカ景気の噂を聞きつけた商人や農民たちが集まりました。

小樽、札幌、旭川など道内各地で伝道活動続けたピアソン夫妻は、1914年、日本最後の伝道地として野付牛を選びました。ハッカ景気に沸く地で「遊郭」を阻止できたのは、夫妻の熱心な取り組みがあったからだといわれています。ピアソン夫妻は、北星とも関わりは深く、最初の校地（北1西6）の使用期限が切れ、学校存続が危ぶまれると新校地の入手を援助し、スミス先生が休暇帰国中の学校運営も支えました。野付牛に移り住んでもからも、北星女学校の生徒と交流を持ち、英語劇「噫無情」の指導も行ったそうです。



1924年 英語劇「噫無情」

エバンス先生は、1921年と1928年の冬休みを野付牛のピアソン邸で過ごしています。米国の友人に宛てた手紙には、そのときのようすやピアソン夫人のバイタリ



ピアソン邸の庭でスキーを楽しむエバンス先生たち

ティーあふれる働きについて綴られています。

記念館に展示しているアルバムにも、その休暇中の写真が何枚も残されています。ここは資料保存だけでなく、人とのつながりを知る場でもあると感じました。



矢島 あづさ